

コラム

「船長逮捕にみる日本外交の難局」

客員研究員 新井 光雄*

日中間でまたも外交上の難題が発生してしまった。その余波でエネルギー問題も巻き込まれる結果となっている。いや根底には地下資源があるとするのが正しい見方なのかもしれない。どこかに何とかなるだろうと楽観的な見方を持っていた。事実、事態は好転してきたかに見える。しかし、事態は徐々に悪化してきているというか、見ないで来た問題が露呈したという感じだ。今更ながら国と国の関係がいかに微妙なものかを思い知らされたと言った方がいい。余り悲観的になることもまた危険とはいえ、不安は払拭できない。外交は国の威信をかけての面子の対立、簡単ではない。人間関係に近い。一度壊れた関係はその修復には膨大とっていいエネルギーが必要だ。しかし、それだけのエネルギーを使っていかなければならないのが日中関係なのだろう。解決への名案など全く持たないが国民全体が考えておかなければならない。

今回のことの始まりは船長逮捕。沖縄県の尖閣諸島沖、日本領域で発生した中国漁船の衝突事故で、この事件に対する中国の対応が抗議から、「強烈な報復措置」という方針に沿って現実が動き出し、予定されていた東シナ海のガス田開発をめぐる局長級協議が一方的に延期されてしまった。エネルギー関連は一応、これに留まるが、ほかにも中国からの企業による一万人観光計画の中止、航空路線増便協議、北京での民間行事の日本参加の事実上の参加拒否といった具合で、ことは「閣僚級交流の停止」といったところまで進んできてしまった。その象徴としての発言が温家宝首相の強硬発言。そして最終的には拘留期限を残しての船長釈放。この是非を巡っての日本国内からの高まる批判。ひとごとのような言い方となるが「やっかい」というほかはない。個人的には考えるという他にこの問題に関与できない。

外交は面倒極まりないのだろう。危険なのは中国内の反日的な示威行動、かなり大掛かりなデモなどが発生してきた。意図的なところも伺えるから、面倒になってくる。戦争の危機とまで言えば大仰なのだろうが、武力的な衝突というような事態は想定だけはしておかなければならないように思える。今後もう一度、今回の事態と同じようなことが起きたらどうするのか。そんな危惧がある。幸いというべきか、日本国内は比較的冷静だ。いや無関心なのだという指摘もあるが、唐突ともいえる船長釈放で感情的になり始めた感じもしないわけではない。メディアもNHKをはじめ、日本政府の姿勢に批判的になった。

ある識者の意見だが、国家間の関係は一種の恋愛感情的なところがあり、問題が発生してしまうと手がつけられなくなるほどに燃え上がってしまう恐れがあるという。船長逮捕、そしてすっきりしない釈放という、小さいとは言わないがそうも言える問題に国家の威信がかかる。感情的プライドの衝突となって、問題が飛躍してしまう。領土は国家主権にからむから、当然でもあるが、突き進めば双方の失うものが多すぎる。それでも収拾が出来ない。確かにこじれた「恋愛問題」かもしれない。

* 地球産業文化研究所理事 元読売新聞編集委員

ではどうすれば、と言っても名案など持つはずもなく、陳腐だが、最大限、感情的な対応だけはしないということだろうと思う。対中強硬の意見も理解できる。腰抜け外交という批判にも同調できる。だが、単純に強硬ですむ問題でもないようにも思える。新任の前原外相は「日本の法律にのっとって粛々と対応する」としてきた。こう答えるほかになかったに違いない。要は結果であり、目下の状態を改善するということに尽きる。それにしても船長に特別な意図があったのかどうか。偶発とされるが、あったと言い切るむきもある。後者なら問題はさらに面倒だ。言葉の遊びのようになるが、それこそ高度な政治的外交の手腕をみせてもらうしかない。外務省の腕の見せ所だ。そのための存在である。周辺の海底には油田があるとされている。日中共同開発が進められるはずの東シナ海には中国のガス田がすでにある。底流にエネルギー問題があることも視野にいれておきたい。何も提案できずに無責任だが、日本の外交力をなんとかみせてほしいところだ。個人的には超法規的解決であって結果はよかったとは思いますが、これには反対・異論も多い。簡単ではないからこそ、外務省の日頃の活動がものを言うはずだ。たまさか駐中国日本大使が民間出身。これを選択したのは民主党。民主党外交の試金石だろう。普天間問題を含めて民主外交にはどこか頼りないと思われてしまってきている。

それに今回の事態で思い出したのはもう歴史的に忘れられたことなのだろうが、フランスが1980年代に実施した日本製品に対するポアチエ通関問題というのがある。フランスが当時、日本の電機製品のフランス市場への進出に対抗。通関事務を地方都市のポアチエに限定したのだ。職員の体制などの関係で、VTR（ビデオテープレコーダー）のフランスへの輸出が自動的に制限される。輸入は止めていない。事務が滞留してしまっているだけ、ということだった。ふざけた話だった。日本をバカにしていると思った。中華思想ならぬフランス思想をみた思いだった。逆に言えば、国家らしい国家。ナポレオンを生んだ国らしいとも。今回の中国にもそれを感じるところがある。

国家の威信がかかるからと言っても、どこかに報復という感じを払拭できない日本人会社員の逮捕。レアアースも輸出ストップなど、少なくとも日本的な常識からはかけ離れている。公式にはどちらも今回の事態と無関係ということになるのだろうが、それには無理がある。仏中の共通しているのは大国の傲慢といってもいいのかとも思えるところだ。

アジア諸国も中国の今回の対応から多くのことを学んだに違いない。そうした発言もある。これをエネルギー問題に敷衍すれば、自由化やら環境やらにシフトしてしまっていたエネルギー政策を安全保障の観点から見直しておくことだろう。もちろん簡単なことではない。エネルギーは「安くて、環境にやさしい」が常識となり、安全保障の観点は付け足しになってしまっている。今年がかって石油危機を演出したOPEC（石油輸出国機構）は発足して50年という。よく言われることだが、日本人の平和ボケは残念ながら事実かもしれない。やたらとナショナリスティックになることだけは避けたいが、底流に持っていないと事態は最悪に繋がる危険もあると承知しておきたい。けが人もほとんどいないような船と船の衝突。そこから導きだされたこの現状。一庶民の結論としては残念ながら「冷静」しかない。

お問い合わせ：report@tky.ieej.or.jp